

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	フランス語半過去形と認知言語学的枠組み : メンタル・スペースによる記述の当否
Author(s)	市川, 雅己
Citation	文学部論叢, 79(文学篇): 157-166
Issue date	2003-03-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/2755
Right	

〔論文〕

フランス語半過去形と認知言語学的枠組み ——メンタル・スペースによる記述の当否——

市川 雅己

L'imparfait du français et des schémas cognitifs ——Pertinence de l'explication par les espaces mentaux——

Masaki ICHIKAWA

要旨 (résumé) :

L'imparfait du français n'est pas suffisamment expliqué par les schémas cognitifs des espaces mentaux à cause de ses emplois très variés y compris ceux dits modaux.

A la place de cette explication, nous proposons de nouveau sa fonction essentielle: il construit les coordonnées (l'«espace») ailleurs que moi-ici-maintenant (l'«espace d'énonciation»).

キーワード：半過去形、認知言語学、メンタル・スペース

はじめに

メンタル・スペースによる認知言語学的アプローチが近年、盛んに行われており、その法・時制記述への適用も行われてきている。本稿では、フランス語半過去形の多岐にわたる用法をこの枠組みでどのように説明できるか検討する。結論を先取りしていえば、現行の認知モデルでは半過去形の種々の用法を十全に説明することは困難である。認知モデルの改良とより精緻なモデル構築とが不可欠であろうが、このような認知モデルで自然言語の法や時制といった現象をそもそも説明しうるのかについて懐疑的にならざるをえない。

我々は、メンタル・スペースによる、このような半過去形記述に代えて、

この形の本質的機能を改めて提起する。

1. メンタル・スペースによる時制記述

1.1. FAUCONNIER (1997)

FAUCONNIER (1997) による時制記述を概観しよう。

- (1) Max is twenty-three. He has lived abroad. In 1990, he lived in Rome. In 1991 he would move to Venice. He would then have lived a year in Rome.

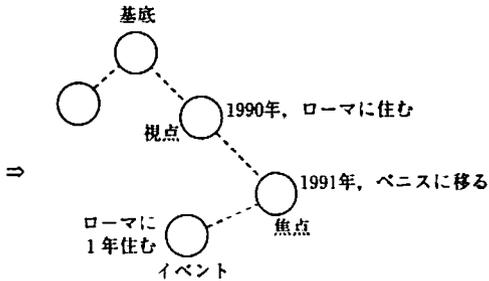
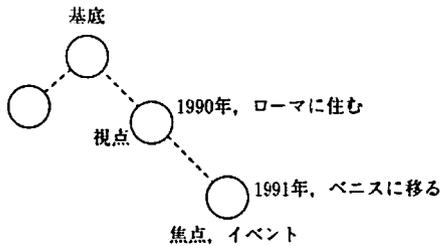
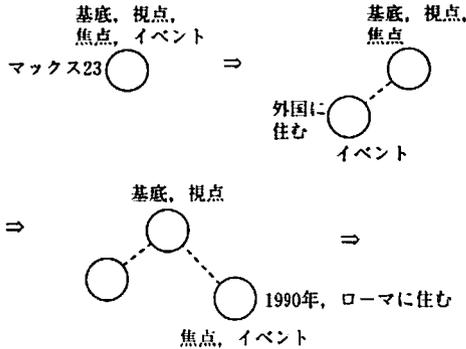
例文(1)の時制の使用に関して以下のように説明される (図(3)参照)。

- (2)a. まず、単一のスペースから出発する。これは、基底であり、かつ最初の視点と焦点でもある。このスペースに、マックスが23歳だという情報を付与する。
- b. このスペースを焦点にしたままで、マックスが外国に住んだことがあるという (現在に関する) 情報を付け加える。この情報は、過去イベント・スペース (「マックスが外国に住む」) を通して与えられる。
- c. 次の文では、in 1990 はスペース導入表現である。それは新しい焦点スペースを設定し、その中に「マックスがローマに住む」という内容が作られる。このスペースは、新しいイベント・スペースでもある。なぜなら、われわれは、マックスがローマに住むというイベント/状態を問題にしているからである。
- d. 今度は、この焦点スペースが視点となって、そこからマックスの次の移動が見られる。直観的に言って、In 1991, he would move... と言うときには、1991年は1990年に対する未来として提示されている。1990年スペース (「マックスはローマに住んでいる」) が視点となり、そこから新たな焦点 (かつイベント) を作る。すなわち、「マックスがベニスに移る」という内容をもつ1991年スペースである。「同じ」ことが、基底 (現在時) を視点に使うなら、In 1991, Max moved to Venice のように違った風にも言えた。

e. 最後の文 He would then have lived a year in Rome は、1990年を視点に、1991年を焦点にし続ける。その一方で、焦点（1991年）に対して過去であるイベント・スペース（「ローマに1年住む」）を用いている。

(訳書pp.89-90)

(3)



(訳書pp.90-91)

これらのカテゴリは、CUTLER (1994) によれば、次のように特徴づけられる。

(4) 過去

スペース N に対して適用された「過去」は、次のことを表す。

- 1) N は焦点である。
- 2) N の親は視点である。
- 3) N の時点は視点より前である (つまり、 N の親より前である)。
- 4) N 内に表示されているイベントや属性は (親視点スペースに対して) 「事実」である。

(5) 現在

スペース N に対して適用された「現在」は、次のことを表す。

- 1) N は焦点である。
- 2) N または N の親が視点である。
- 3) N 内に表示されている時間フレームは、視点/基底より前ではない。
- 4) N 内のイベントや属性は (視点に対して) 「事実」である。

「未来」に関しては次のように定義される。

(6) 未来

スペース K に対して適用された「未来」は、次のことを表す。

- 1) K は焦点である。
- 2) K の親は視点である。
- 3) K の時間フレームは、視点より後である。
- 4) K 内のイベントや属性は (視点からの) 「予測」である。

更に「完了」に関しては次のように定義される。

(7) 完了

「完了」はイベント・スペース N に対して適用され、次のことを表す。

- 1) N は焦点ではない。
- 2) N の親は視点である。

3) *N* の時点は、視点より前である。

(訳書pp.91-93, p.96)

したがって、例文(1)の最後の文における完了形は、英語の次のようなコード化の結果とされる。

(8) 単純過去時制 + [will + [have + [動詞 live + 過去分詞]]]

⇒ [will + 過去] + [have + [live + 過去分詞]]

⇒ would + [have lived]

⇒ would have lived

(訳書pp.99)

1.2. CUTRER (1994) によるフランス語過去形の記述

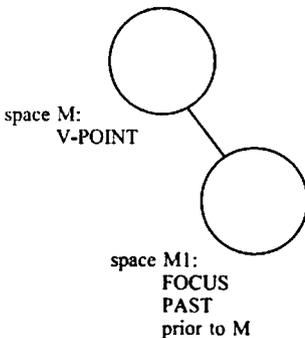
同じメンタルスペースの枠組みでフランス語の過去形を扱った CUTRER (1994) の記述をみよう。

彼女は当初から無条件に、半過去形を過去形の一つであり、「未完了」のアスペクトを表わすとしている。「過去未完了」を単純過去形と対比して彼女は以下のように図示している (図(9)参照)。

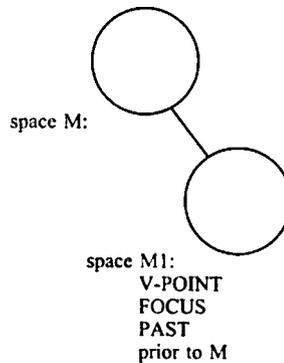
(9)

PAST IMPERFECTIVE

Step 1: PAST



Step2: IMPERFECTIVE



(*ibid.*, p.193)

単純過去形（複合過去形）（左側）は、V-POINT（視点）が親スペース（発話空間）にあくまでも留まっているのに対し、半過去形（右側）では、親スペース（発話空間）に当初あった V-POINT（視点）が、新たに作られた過去焦点スペース M にシフトすると説明される。

この違いによって、次例、

(10a. Il *allait* venir.

b.*Il *alla* venir.

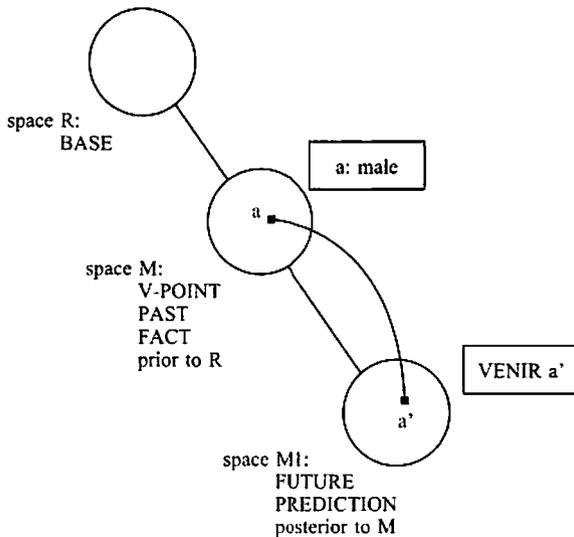
c.*Il *est allé* venir.

の容認可能性の相違が説明される。過去の1時点からみた未来を表わすためには、この V-POINT（視点）の過去焦点スペース M へのシフトが不可欠であるからである。

このメカニズムは以下のように図示される（図(11)参照）。

(11)

'Il allait venir'



(*ibid.*, p.198)

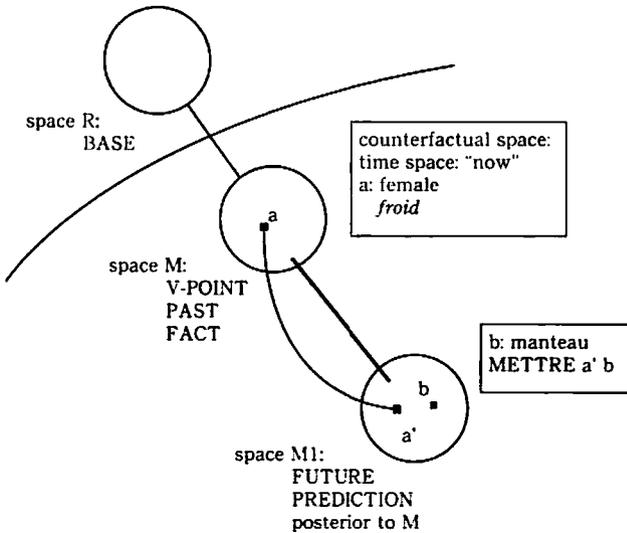
仮定節に現われる半過去形については、次のように説明している。
 次の例(12)においては、

(12) Si elle *avait* froid, elle mettrait un manteau.

仮定節の解釈が(下線本稿筆者) 仮想空間 M を作り、その仮想空間 M にシフトした V-POINT (視点) から未来のイベントの述定がなされるとされる(図13参照)。

(13)

'Si elle avait [Imparfait] froid,
 elle mettrait [Conditional Present] un manteau'



(*ibid.*, p.200)

2. 半過去形の用法の検討

半過去形の用法中、時制的なものは、上述のようにメンタル・スペースにより記述できるであろうが、所謂、法的用法は説明可能であろうか。

半過去形の法的用法とは例えば次のようなものである。時間的に発話時より過去にあることを意味しない用法である。

- (14) Une minute de plus, je *manquais* mon train. (反実仮想の読みで)
- (15) Ah, zut! Demain soir, il y *avait* un bon film à la télé.
- (16) Raphaël *votait* socialiste, Delphine *votait* écolo.
- (17) Si Raphaël *votait* socialiste. Delphine *votait* écolo.
- (18) Poirée ne *manquait* pas la dernière cible. il *était* champion du monde.
- (19) Alors tu *étais* la maman et j'*étais* le bébé j'*avais* faim...(imparfait pré ludique)
- (20) Et la dame qu'est-ce qu'elle *voulait*? (imparfait «forain»)
- (21) Qu'il *était* mignon, ce petit! (imparfait hypocoristique)
- (22) Je *voulais* te dire quelque chose pendant que nous sommes seules.
(atténuation)
- (23) Elle a des yeux bleus, que votre mari n'*avait* pas. (dit «mépris»²⁾)

こうした例をメンタル・スペースにより説明することは、現行のモデルによる限りは困難であり力不足であるといわざるを得ない。

そもそも CUTRER (1994) は前述のように、半過去形を過去時制の一つであり未完了アスペクトを表わすとあらかじめ認めてしまっており、半過去形は過去時制ではなく、アスペクトに関して不定であるという我々のとる立場と異なる(市川(1988)、(2000)参照)。

3. 半過去形の本質的機能

我々が提唱する半過去形の本質的機能とは次のようなものである。市川(1988)でも萌芽的にはあれ既に主張されたことであるが、

- (24) 半過去形は、発話空間 (moi-ici-maintenant) とは異なるどこかに発話空

間とは別個の空間 (coordonnées) を構築する。

これは一見、曖昧に見えるが、素朴でありながら融通無碍であり、前記(4)~(2)のような半過去形の多岐にわたる用法を記述することができる。

4. 結論に代えて

メンタル・スペースのような認知言語学的モデルでは、半過去形の多岐にわたる用法を統一的に説明することは到底不可能である。

半過去形の本質的機能についての、これに代わる説明として、半過去形は、「発話空間 (moi-ici-maintenant) とは異なるどこかに発話空間とは別個の空間 (coordonnées) を構築する。」と規定した。

この考え方によれば、半過去形の用法が統一的に説明可能であるが、個々の用法への適用の詳細については次の機会に譲らざるを得ない。

注

- 1) 訳書に *N* とあるのは誤りである。
- 2) この用法が軽蔑を表わすということは IMBS (1968) の記述によるが、LEBAUD (1993) はこれを批判し、軽蔑を示すことは特になく、むしろ夫が故人になっているという文脈が想像されるとしている。

Références bibliographiques

- CUTRER, M.(1994) *Time and tense in narrative and in everyday language*, Ph. D. diss., Univ. of California, San Diego, 449p..
- DAMOURETTE, J. & PICHON, E.(1911-1950) *Des mots à la pensée, Essai de grammaire de la langue française*, t.V., d'artrey.
- DUCROT, O.(1979) «L'imparfait en français», *Linguistische Berichte*, 60, pp.1-23.
- FAUCONNIER, G.(1997)*Mappings in thought and language*, Cambridge Univ. Press, 坂原他訳 (2000)「思考と言語におけるマッピング」、岩波書店、pp.87-119.
- IMBS, P.(1968) *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- LEBAUD, D.(1993) «L'imparfait: indétermination aspectuo-temporelle et changement de repère», *Le gré des langues*, 5, pp.160-176.
- (1994) «L'imparfait, analyse linguistique en vue d'une conceptualisation en classe de FLE», *Le français langue étrangère à l'université, théorie et pratique*, Actes du Colloque International de Varsovie, 25-26 novembre 1993, Instytut Romanistyki, Uniwersytet Warszawski, pp.217-230.
- (inédit) «Problème de morphologie verbale / Le paradigme *ais, ais, ait, ions, iez, aient*, cas de l'imparfait de l'indicatif», 18p.

- LE GOFFIC, P.(1986) «Que l'imparfait n'est pas un temps du passé», *Points de vue sur l'imparfait*, Centre de publications de l'Université de Caen, pp.55-69.
- SERBAT, G.(1988) «Le prétendu «présent» de l'indicatif: une forme non-déictique du verbe», *L'information grammaticale*, no.38. pp.32-35.
- WILMET, M.(1976) *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
- 阿部 宏 (1989) 「je l'attendais 型の半過去について」, 『フランス語学研究』第23号, pp.55-59.
- 市川雅己 (1983) 「L'imparfait narratif (『物語の半過去』) について—通時的視点から—」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第1号, pp.43-58.
- (1988) 「半過去の本質的機能について—『物語の半過去』(imparfait narratif) を通して—」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第5号, pp.81-93.
- (1993) 「紹介: 時制記述の枠組みについて—A. MOLENDIJK, *Le passé simple et l'imparfait: une approche reichenbachienne*」, 『フランス語学研究』第27号, pp.68-72.
- (1999a) «Sur l'imparfait dit hypocoristique», 『文学部論叢』第63号(文学篇), pp.1-3.
- (1999b) 「紹介: 半過去形の機能について」, 『フランス語学研究』第33号, pp.65-69.
- (2001) «Ah! qu'il était joli joli, mon petit Maurice! —De l'imparfait hypocoristique à la fonction essentielle du tiroir—», 『文学部論叢』第71号(文学篇), pp.83-91.
- (2002) 「半過去形理解のために—本質的機能確定のための予備的ノート—」, 『文学部論叢』第74号(文学篇), pp.73-87.
- 岩田 早苗 (1997) 「フランス語の“quand + imparfait” に関して」, 『関西フランス語フランス文学』第3号, pp.67-75.
- 春木 仁孝 (2000) 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo.—半過去の属性付与機能について—」, 『フランス語フランス文学研究』第77号, pp.84-96.
- 前島 和也 (1997) 「時制と人称: 半過去の場合」, 『フランス語フランス文学』(慶應義塾大学日吉紀要) No.25, pp.117-144.